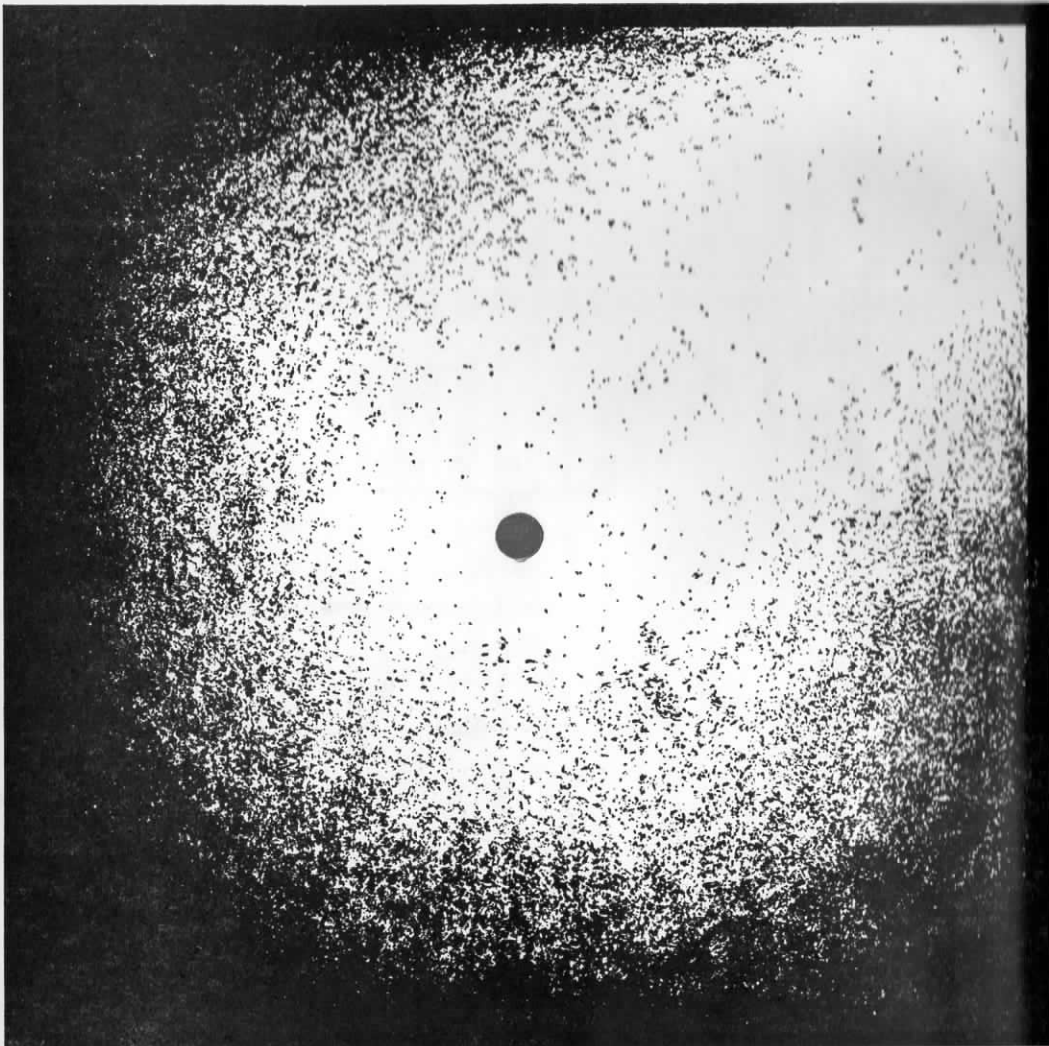


72/5  
黒の手帖  
13

黒  
の  
手  
帖

13  
号



一  
九  
七  
二  
年  
五  
月

定価 200円

テロリズムとヒューマニズム	秋山清	1
書物の影	堀本吟	8
矛盾を感じることの矛盾	大沢正道	21
大杉栄の革命理論に 関する私論(上)	諸伏恒	26
ブルードンの弁証法	H.ド・ルバック 大沢正道訳	40
スペイン革命に おけるCNT(12)	ホセ・ペイラツ 今村五月訳	57
編集後記		

表紙 高木 昭

# テロリズムとヒューマニズム

## 小包バクダン

小包で爆弾が送られて来て、爆発した、送り主は赤軍らしい、という新聞記事を見たとき、私はすぐギロチン社のことを思い出した。あまりに似ている。ギロチン社の時は、爆発はしたが、その直前に放り出されてケガ人はなかったときいている。今度は人事に及んだ。そこはちがっているが、発想は一つだといっている。新聞は人間の行為ではないなどとあらゆる非難をあげているが、人間の行為以外であろうわけがないと私は思っている。美化されすぎた武士道的見地からすれば卑怯の行為だということになるかもしれないが、さいわいに我々は武士でもなく、武士道とも縁がない。武士道——といわれているものの蔭のどこかにヒューマニズムが在るようになっている人も多いらしいが、武士道などというものはヒューマニズムからのもっとも対極のものだと考えることの方がずっと健康なことだと私は思っている。アンチ・ヒューマンなものの中に、ほんのすこしばかり人間味のある行為があるとそれが武士道の粋である

秋山清

かのごとくに考えて嬉しがる。そのこと自体、武士という支配層が如何に民衆にとって非人間的な圧力的な階級的存在であったかを考えさせるのではないか。(いや、私は武士や武士道を論ずるためにペンをとったのではない。だが、われわれの日頃の言動のどこかに、武士道を良しとするものに影響されたものの片影がのこっていて、何かのときそいつがちよっぴり、気ぜわしい社会時評などに顔を出していないか。)

鬼畜の行為だなどと、一寸したことがあれば新聞などがいたがる。鬼畜的行為というべきものは、法律や規則にかくれ(保護されて)われわれにのしかかっていることを、われわれはふと忘却してしまっていることがある。世間でさき立っている非人間的な殺傷事件などを知ると私は、これ以上にヒドイことは他にないのか、とすぐそのことを考える。

人の目に暴力とみえる暴力などは暴力の些小なるものにすぎないのだ。戦争はあまり尨大な暴力であるために、身辺にさし迫っていることを知っていないながら、われわれはこの最大の暴力についても

すれば忘れがちになるばかりか、贅美さえしかなない。いろいろの形容詞をそれにつけ加えて。

国家の名による殺戮、民族の名に基づく暴力、私はいつもわが身辺に起った事件の対極にそれを置いて比較して考えようとするこの習慣を信用している。ほんの少し前まで、私も世論の動向のように、学生の内ゲバや暴力にいまよりもきびしい思いをしてきた。自己の平和主義をより貴しと思ってきたが、じつは暴力ということについては、巨大で見失われがちな暴力をいつも念頭において、暴力とは何か、をかんがえることの方が健康ではないかとようやく自分にいましめている。

暴力についてはもう一つの問題がある。ゲン骨で一つなぐっても暴力として戒しめねばならない場合があるということである。それは、自分の論理だけを押しつけることに急ぎすぎず、対等の場で、相手の意見をも尊重した上での対立でなければならぬということである。問答無用は封建社会における武士の民衆にのしかかる論理であり、かつての軍人のクーデターの論理であり、先手必勝の戦争の論理である。それは民主主義というものの最低のラインにも至らざるものである。大衆的社会的協力のいうものがわれわれの時代に在るとすれば、意見を述べる自由の在るところにしか、それは成立しないだろう。対等の言論が屈服されるころには、変革も平和も自由も有り得る根拠がなく、その方向に向っての進歩もあつたものではなく、ただ弾圧の暴力があるだけのように、近頃考えられてならない。そしてそれは暴力がこの上なく無価値に存在することである。

もつとも恐怖的な暴力、というものはまず巨大で合法的で正体を

おさら危険度は僅少だ。生産工場の排泄物は瀬戸内海と東京、伊勢、大阪その他の湾を廃海たらしめんとしている。この元兇は法律によって国家の政府が許可した生産状況である。大量の人間生活の廃棄が堂々と許され実行されつつあるということだ。

しかし私は、この大きな人間廃棄の状況悪を楯とすることによって、かつて古田大次郎らがやり、今また赤軍がやった小包爆弾のことを、罪悪なしと考える者ではない。だがしかし、一方に国家が人間の被害を熟知しながらその事実を放棄しているとき、小包爆弾による暴発の不幸を鬼畜的行為として、新聞・テレビが報道につとめることが、アンバランスだといふのである。わるいといえど、ちもわるい。だが政府が許可した事業の犠牲とされることの方が、罪人として処罰される対象がないだけに、いつそう兇悪だという考えが私をとらえて放さないのだ。権力の巨大さに許され守られた暴力以上の暴力が在るはずはないと私は民衆の中から叫びたいのだ。そして、これは大と小との問題ばかりではなく、また権力に庇護されることとされないものとの心情的比較ばかりではなく、ここにはヒューマニズムの問題が介在しているのだということがふと私にはかんがえられる。

暴力を発する者は、殆んど自己を賭けるか、それに連からぬ決心をひそめることなしにはそれは不可能であろう。究極としては爆弾を抱いてセルゲイ大公の車の下に飛込んだカチャーエフの行為に、遠近、大小の差はそれぞれにありながら、それに通ずる道がつづいている。そういうものとしてしか、テロリズムというものは成立たないのである。

民衆に見現わされないようなかたちで存続するものである。そういうものの存在することを心得ている者には、如何ほど合法的にしようも見ていても、国家や政府の名で行うことといえども暴力は暴力としか見ることができない。少し前の時期のわれわれは、国家の名によるのであれば暴力は暴力でないとさえ考え勝ちな習慣だった。日本の民衆もようやく、今はそのことに気づきつつある。政府と政府あるいは権力階級の出店機関にすぎない自治体の政庁が許可した石油、自動車をはじめとする工場施設が、そらと山と川と海と都会の家の中にも至る公害の元兇である暴力的現実を。

彼らはいくらかでも民衆の環境汚辱による生存の危険について、その施設許可のときに考慮したことの狭い国土が交通麻痺に陥るだろうことを考えて見たこともかつてなかっただろう。生産が増強し、手持のドルがだぶつければ、少し前まではそれで御の字だったのだ。国民の生活や環境のことなどよりも法律と規則に当面触れなければ、それ以上の良し悪しを判別する責任はどこにもないとしてきたのである。それが国法というものであり、国法を守る義務の在り方というものである。それに疑惑したり、反対したりする者は、合法的に潰そうというのである。われわれは戦後の経験としてそれを知ってきた。国民生活が国民の名による法律の運用の下で合法的に侵されるというこの現実の方向に、少しの疑惑をもったことのない者が政治家なのである。それをもつことをせせらわらうのが政治である。

小なる武器といえども危険だ。人間の命が狙われる。しかし日本の過剰生産の社会状況よりも危険ではない。武器は許可しない。な

#### 『死の懺悔』の序文と解説

ギロチン社の一人古田大次郎の獄中手記『死の懺悔』は昭和はじめに出版されて、その純情な青年の心がひろく人々を感動させ、その本は当時のベストセラーであったという。その本が二、三年前復刻されたのを近頃入手して読んだ。読んだというよりも、今度の刊行に当ってあたらしく付け加えられた江口渙の序文と伊豆公夫の解題にめぐりあつた。伊豆公夫はこんな風のことをかいている。

「このような思想と行動(古田らのテロリズム)は大衆運動・社会主義運動とは無縁であるばかりか、かえって有害なものであることは、当時にあつても、現在でも批判されつくしたことである。」

「古田は、大衆の中へ入って大衆とともにたたかっていた経験をほとんど持つておらず、個人的ヒロイズムに支配され、大衆をたやすくは信頼しえないものとしてしか見ていなかった。」

「一九世紀のロシア・ツァーリズム専制下、大衆運動の未成熟もあつて、テロリズムを信条とするニヒリストの陰謀があつたと、事情は似ているが、日本の大正末期にこのような行動があつたのは、権力側にも責任があるといえ、語の正しい意味でアナクロニズム(時代錯誤)と云えよう。」

私は伊豆公夫(あるいは詩人赤木健介)のこれらの言葉に、いまさらの感想はない。何十年も前から彼や彼等はこんな風にしか物をいったことがない。戦前、戦中、戦後と彼等自身幾度変転しながら、いうことはいつとも一つである。テロリズムは有害である、批判されつくしている、個人的ヒロイズムにすぎない、などという。どのよう

個人的ヒロイズムとは如何なるものか、についての意見の開陳はついにいままに、おこがましくも「解題」などを書いている。

重要な問題がここには存在しているのに、それをわざと忘れていくように見える。その問題とは何か。彼らの行為、行動は時代おくれ、批判済みで三文の値うちもないが、その古田大次郎の『死の懺悔』は「死刑を直前にした囚人の告白として大きな価値をもつ」「文学的にも十分に評価されるべきもの」という、伊豆公夫の分裂症的評価のことである。

テレビやラジオに出て来て、赤軍派の南軽井沢事件のとき、したり顔で意見を述べている連中、たとえば大野明男などという元学生運動家で当世向き評論家（私はいつかしら彼と面識があるので代表的にここに名を挙げる、それだけのことだが）の手合なら、こんなことも世渡りの術だろうが、筋金入りの日本共産党員（だと私は思っているが）詩人赤木健介（あるいは哲学者伊豆公夫）の言として、これはお粗末。思想と行為とを二元的にとらえるとき、そのような論じ方をする者は、それによってわれわれの批判の対象となるべき彼は消滅する。二つの名をつかって、二面の仕事をしている者の場合、二面の仕事に多少の分裂や対立があっても知られずに見すぎられることがあるかもしれない。（そこを狙って無責任な分裂的言動を用いる輩もなしとしない。）しかし伊豆公夫も赤木健介も日本共産党的共産主義者である。赤木の詩や短歌が下手クソで、伊豆の哲学が高尚であったとしても、共産主義としての統一を不可能にするものではない。しかし赤木健介の戦中の研究『在りし日の東洋の詩人たち』と彼が戦後すぐ書いた詩人論「高青邱論」とは論者の民衆的立場が矛盾する。赤木健介の名において矛盾する。哲学者伊豆公

田大次郎らの全部をそのまま肯定しないつもりである。しかし彼らのテロリズムがなかったら古田の獄中記も中浜の獄中文学もなかったと思う。それを別々にあれはダメ、これはいい、人間はダメだが、獄中記は素晴らしいなどというのではない方こそ、無責任なるものとし、伊豆の意見を認めようとは思わない。ここに一人の男古田大次郎がいる。彼についてはその獄中記とテロルの行為をもつて、少くとも最低にその二つをもつて古田大次郎が何を志し、何を為さんとしたか、一個の人間存在としての評価もそこからの帰結としてでなければとらえ得ないのではないかと考える。

単純素朴な善玉悪玉主義、一個の人間の行為は間ちがいが心底はうつしくしかなかったなどと評することは、対象と併せて評者自身をも軽視することに他ならぬではないか。

伊豆公夫がテロリストを「個人的ヒロイズムに支配されたもの」というのはあまりに主観的で常識的な解釈でしかなく思われる。すくなくとも、テロリズムを自己に適した方法という自認なしにテロルを信条することはできないだろう。大衆運動かテロリズムか、という二者択一的思考がど、だ、無理な発想なのだ。現在の日本共産党組織下の民青は黄色のヘルメットである。赤、黒、青、その他の如くに目立って機動隊と対立するものではなく、夜の光で見れば白と見まがうものでしかない。あれは伊豆らという大衆の性格をよく現わしている。彼らは、新左翼を弾圧する機動隊等に直接手をかしたくないだろうが、その抗争にも手を貸すこともしない。中立といえば体裁はいいが、前衛のイメージを保続せんとしながら、対立と抗争の外に在ることを良しとしている者は、反体制とはいえもしない。その体質の必然性が黄ヘルメットなのである。

夫がそれと同じ手口で、古田大次郎の『死の懺悔』を批評することを私は見のがすわけにはいかない。テロリスト古田大次郎は『死の懺悔』の著者古田大次郎である。彼のテロリズムは個人的ヒロイズムで、社会主義運動に有害で、大衆を信頼しえない、犠牲者やその遺族に詫がる態度がとばしい、アナクロニズムの行為である、などとはとんど口を極めてののしった後で、

「『死の懺悔』は、運動史思想史の問題よりも、ヒューマン・ドキュメントとして、とくに死刑を直前にした囚人の告白として大きな価値をもつものであり、文学的に評価されるべきものをもって

いる。」  
と書いたことを、前のは共産主義者としての発言、後者は春秋社社員として売るために付けた解題、とまでは受けとらないとしても、このような分裂的評言の場合、古田大次郎という稀なヒューマンストの人格、その人間の歴史及び日本人としてのプラス・マイナスを背負って生きて死んだ、古田大次郎という個人の存在とその人間的尊厳は失われてしまう。

私はこう考えたいのだ。

テロリストとしての古田の失敗、もしそれがなかったら、彼の獄中の回想はなかったであろう。失敗のテロリストでなかったら彼の獄中記はあのように書かれなかったであろう。テロリスト古田、失敗のテロル、その獄中記、私はこれを一貫して古田大次郎を考えたいのだ。テロルは古い、大正の日本では時代おくれ、だが獄中記だけは良いと、こんな物の見方をするやつは一体何だ、というのが私のいつわらない今の感想である。私はテロルをもつて革命のための唯一の手段として、すくなくともそれに身を賭した中浜哲や古

大衆の名によって後退的な議会主義政党にわが国の無産派政党が挙げて変貌しているとき、同じ大衆政党の日共に特別な期待をかけることはない。だが古い習慣で私らも、その哲学者や文学者にはともすれば、まだ多少の革命的な良心をふと期待して失敗する。私が伊豆公夫のかいた『死の懺悔』の解題に目をとめたことは、それと同じ心境だったかもしれない。彼らの正体が知れた今日、これは私の独り相撲に終るべきものである。これ以上の追及はすでに必要ではない。だが、彼らと私（たち）の絶対的な対立が、「テロリズム」をめぐっては如何に現われるものであるかについてだけ、一言しておきたい。

私はテロリズムというものはいつも時代錯誤を伴うものだとこのことを認める。この点伊豆が古田らを「語の正しい意味でアナクロニズム」といっているのと根本的に対立する。アナクロニズムとして私は肯定しようとするのであり、アナクロニズムとして彼らはテロルを否定するのである。

ここに方向を一つにした幅ひろい運動が存在するとする。その尖端にはいつも身を賭したものが立つ。その身の賭し方は、テロル、軍事、組織、研究の何れとするも、自分が革命後に現実の陽の目を見ようとしないうちにおいて、自己否定において共通する。またその自己否定によって民衆と隔絶する。目的を一つにし、方向も同じくしながら、民衆とどこかで隔絶することによって彼らは前衛なのである。

前衛と後衛とは速度のちがいが、脈絡を欠落することがある。脈絡を失うことによって、一つのものであるという自覚あるいは連帯感すら失われるときがある。支配者、圧制者、資本家、宗教と政



治の権力の把握者、それらの階級と対立して立った民衆の動向ははるかに一つであったものが(あったはずのもの)今ひろい戦線の中で連帯感が失われたとき、戦術の異なる前衛が、一つの方向に進むものだという共通の信頼感も介在しなくなる。民衆、大衆の中から脱落も相つぐ。

わが大正期には、階級的運動は、それぞれの立場に在りながら(労資協調派、ホルシェヴィキ派、アナキズム系、労働者の階級的連帯感が失われてしまつてはなかつた。テロリストの心情も伊豆がおこがましくいったようなヒロイズムだけが突出して成立し得るものではない。ヒューマンイズムのパイプが彼らと直接連絡もなかつたような労働者階級をつないでいた。まして古田らは当時アナルコ・サンジカリズムにたいしても対立し、「古田大次郎は、アナ派の系統の青年であつた。しかし、彼が本書のなかで書いているように、彼は労働組合のゼネストによって権力を打倒するという大杉らのアナルコ・サンジカリズムとはほとんど無縁の思想運動に参加したのであつて」「ロシヤのニヒリストに傾倒し、その行動綱領は個人的暗殺を肯定するテロリズム」と伊豆が解釈してしまつたように受けとることに私は反対する。それは対立であるよりもアナキズムを思想とする運動の二つの面(むろん二つの面だけしかないというのではない)である。希望する来るべき社会の状況、闘争組織としての非中央集権性などにおいて共通するものであり、人間尊重というヒューマンイズムのパイプにおいて、一つであつたのである。でなかつたら、革命運動においてテロリズムが論議される理由も根拠もないのである。またテロリストが、人間を論じ自然を觀賞し、愛を考へるといふこともナンセンスではないはずである。だがそのこ

とにおいて伊豆公夫である詩人赤木健介は古田大次郎に感動を示している。伊豆自身のかかる分裂は、ニヒリズム・テロリズムとヒューマンイズムを相容れないものとしかたらえ得ない彼自身、彼等自身の政治的な価値観、殆ど人間を理解しない価値観にかかつている。

テロリズムはヒューマンイズムである、といういささか常識的には短絡にすぎる思考を私は旧知の伊豆公夫に進呈したい。テロリストとして立つたことも、テロルに失敗したことも、そのひろく昭和の日本人たちにある感動を与えたそのヒューマンイズムも、古田大次郎という一個の人格の総括の中に位置づけられねばならない。如何に位置づけるか、そのことのために新版『死の懺悔』に添えられた江口渙の序文の中にある江口の言葉を思い出さねばならない。死刑の前日に面会した布施辰治に、古田がいったという言葉。

「死刑になるときは菊の花を抱いて絞首台にのぼることにしています」。(注、菊花は天皇の意という)

「この最後の言葉は、葉隠精神とは、一見して異質のもののように見える。だが『革命家は如何に死ぬべきか』ということをつねに日頃考へぬいていた古田大次郎には、やはり『武士道とは死ぬことと見つけたり』という心境と、たとい無意識的にもせよ、一脈相通するものがあつたものと考えよりほかにない。それと同時に彼が進んで選んだテロリズムの道も、明治維新の下層武士が抱いていた小市民的急進主義としてのまちがつた暗殺主義——」  
と書いていた。このような言葉はあまりにいい古された常識であるだけに、常識的な説得力を持ち易い。だからこそ私はいわねばならない。

菊を抱いて刑台上りに上りたい云々は真実ならば古田の最後のセンチメンタリズム、だがしかし、死する者の感傷にわれわれが何をい得るのか。如何に生くべきか、をわきまをさざる言動に終始する戦後の江口の老残を知る者として、死人に口なしの発言を軽侮するまでである。まして、ギロチン社のテロリズムを小市民的急進主義と江口渙が何故に批評し得るのか。彼自身の証言によれば、中浜、古田はその結社への参加に江口を誘い、小説をつくる為になつて拒否したが、経済的援助をしたことになつてゐる。それは行動に参加しない同志的行為ではないか。そして今「まちがつた急進主義」とか、「葉がくれの心境」など古田大次郎を批判している。彼らに援助した江口の行為は何ものか。テロルはダメ、獄中手記は素晴らしいという無恥の二者択一である。

私の江口と伊豆の序と解題に向ける怒りのごときものは何から来るのか。それは彼らのアンチ・ヒューマンイズムにたいしてである。もう一言私はつけ加えたい。ニヒルとテロルの系譜はそっくり暴力主義ではないという私のもつ理解についてである。この問題——あるいは私自身における理解についてまだ解明していないが、暴力主義の語の発する語感にはヒューマンイズムがない、ということだけを言つておきたい。

ロシヤの社会革命党におけるアゼフの裁きのとき、アゼフを支持するサビンコフとアゼフを告発したブルツェフの対立する証言の応酬の中にわれわれは、それが革命の敵であり、ヒューマンイズムの裁きであることが強調されていたことを見た。ヒューマンイズムの敵と民衆の敵とは一つである。民衆のよるこびはヒューマンイズムの側に在るものとして、伊豆や江口が古田大次郎の獄中手記をテロリス

トである古田の手記として読む心掛を忘れなかつたら、日共の略略的立場から読むのでなかつたら、古田のヒューマンイズムとテロリズムを分裂対立させるといふ誤りはなかつたであらう。

赤軍派の革命的情熱が、その派生したハブニング「総括」の非人間性を衝くことによつてのみ批判が終つたとするような浅薄さを私は自分に向けて戒心する。それは権力集団の陥るべき必然の弱点でもあつたが、その点での批判はさらに嚴重でなければならぬ。彼らの陥没したものが、アンチ・ヒューマンな経過の中に口をあけていたことと、彼らのたかきに自己を賭けようとした出発とを混同することは、江口の、伊豆的、テロリズム—ヒューマンイズム—民衆という路線喪失の思考にしか到達しないであらう。

連合赤軍にたいして、浅間山荘の武闘までは意外に人気がよかつたが、リンチの大量殺人が知れ渡ると、いわゆる知識人文化人たちの評価が動揺した。その動揺は、武闘までの自分の同情を過つて否定さえしようとするものであつた。それらの心情を私はアンチ・ヒューマンイズムと呼ぶ。昨日は東、今日は西、「さすらいの唄」の文句のようなたよりなきである。私はテロリズムが性に合はぬと自覚しているが、テロリストの心情に潜むヒューマンイズムを見逃してはならぬと肝に銘じている。伝えられる連合赤軍のリンチ、そこにはヒューマンイズムが感じられない。何故に、革命の志向者がそこに陥没したのか。まったくの想像ながら、究極的な状況では支配的な権威主義、権力主義がヒューマンイズムと自由を、抑圧しつくしたところから発生したのと思う。すでに体質的にそこに至る要素に充満した集団であつたのかもしれない。テロリズムとヒューマンイズム、についての思考はますます私を試練するであらう。(一九七二、三)